

The Roman of Kitakata



深

く沈んだ赤。光を湛える黒。四百年以上もの、長い伝統を誇る会津塗りは、古くからその名を、多くの人々に幅広く知られてきた。

喜多方には、漆器造りの条件が揃っている。市の北西に広がる飯豊山からは、良質の、豊富な木材が産出され、この木材を使って、木工品や漆器の木地などが作られる。また、漆のときは気候条件に大きく左右されるが、喜多方の盆地特有の気候は、上質の漆を生み出す。それに、なにより重要なのは、会津人の、寡黙に、しかも一徹に仕事に取り組む情熱である。この職人かたぎが、会津の漆器を大きく支えてきた。

喜多方の漆器の特徴は、美術工芸品ではなく、お椀など暮らしに必要な日用雑用の仕器を、ていねいな仕事で、しかも手軽な値段で提供するところにある。特産品である揃椀（通称ハツ椀）は、法事などの仏事に使われる食器で、今ではみることも少なくなった、自宅へ客を集めての慶弔のふるまいを偲ばせる。

漆器づくりには、ほこりと湿気が禁物である。頑丈な蔵ならば、分厚い壁で外気と遮断されるため、ほこりや湿気の影響を受けにくい。また、寒暖の温度変化が少ないのも好都合だ。塗師や漆器商が多く住んでいる菅原町には、今も多くの蔵が残っている。

手作りの漆器では、仕上げまでさまざまな工程が必要だ。一年半もの長い歳月をかけて、木地を補正し、磨き、下塗りし、乾燥した後もういちど上塗りをする。もつとも手

のかかるのは最終工程の上塗り、椀の外側、内側、上縁、糸じりと塗り分ける。

塗り分けた器は、ときおり上下を返さないと、漆が流れてムラになる。このため、幅十センチ、長さ一メートル程の板の上に六個の椀を並べ、上にも同じ板を乗せて、二枚の板で挟みながら、六個の椀の上下を一度に返す。この「返し」は、熟練を要する。塗った直後には五分ごと、それから十五分ごと、三十分ごとと時間を置いて行うが、乾きの遅いときは、十数時間も続ける。じつに根気の要る仕事である。喜多方の職人たちは、この伝統の技法を、連綿といまに伝えてきた。現在、喜多方市で漆器製造に従事している人は百一人、生産高は四億二千万円と、重要地場産業となっている。また、上質な国産漆の確保を図るため、漆の植林事業に着手するなど、会津漆器の伝統と系譜を守るために、多くの人々の懸命な努力が続いている。